

平成 2 7 年 6 月 1 1 日現在

機関番号：24402

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24790623

研究課題名(和文)インターネット依存障害の病態および治療に関する研究

研究課題名(英文)Internet Addiction and Mental Health

研究代表者

片上 素久(katagami, motohisa)

大阪市立大学・医学(系)研究科(研究院)・講師

研究者番号：50572971

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：インターネット依存障害(IAD)の病態解明のため、匿名のオンラインアンケートを用いて、インターネット使用に問題がある者における、抑うつ症状との関連を調べた。その結果、抑うつ症状とインターネット依存の重症度との間に相関を認めた。さらにインターネットの使用時間および行動パターンと、精神症状との関連について探索を行った。インターネット依存障害の患者は様々なコンテンツに時間を費やしており、オンラインゲームがその最たるものと問題視されている。本研究ではその重症度とウェブサイト(ブログを含む)の閲覧とオンラインチャットとの間に相関を認めていたが、オンラインゲームとの間には相関は認めなかった。

研究成果の概要(英文)：Internet Addiction Disorder (IAD) can be broadly conceptualized as an inability to control one's use of the Internet which leads to negative consequences in daily life. The aim of this study was to investigate depressive symptoms in Japanese adults of addictive internet use, and to assess the effect of the various internet applications use on the IAD severity.

We found a positive relationship between depression and internet addiction. Those with Internet Addiction Disorder may be spending their Internet time on a wide range of functions, including online games. In this study, internet addiction severity was correlated with hours spent on web browsing and online chat, but not on online games. Although there is a growing amount of literature analyzing the effects of online games on severity of internet addiction, of the various internet applications use, web browsing and online chat affects IAD severity in Japanese adults.

研究分野：インターネット依存障害

キーワード：インターネット依存障害

1. 研究開始当初の背景

インターネットの起源はアメリカ国防総省が 1960 年代半ばに分散的コンピューター・ネットワークの開発に先鞭をつけたことまでにさかのぼることができる。当初はデータを共有するためだけに使う手法であると思われており、コンピューター同士をつなぐものとして意図されていた。しかし、電子メールの開発とともにコンピューター同士の通信手段にとどまらず、それは人と人のコミュニケーションを意味するところとなった。特にワールド・ワイド・ウェブ(WWW)が 1990 年代の初期に出現してから、インターネットは便利な通信手段として急速に拡大し、多くの人々を引きつけることとなったが、同時に極度にのめり込むことによりそれ以外のことを犠牲にしたり、不安や抑うつ症状を引き起こしたりすることから、日常生活および社会生活に支障を来すことも少なくない。

そのような社会的状況を反映し、その活動に没頭し臨床的に重篤な障害および苦痛に至るインターネット依存障害(Internet addiction disorder、以下 IAD とする)という概念が 1991 年に心理学者の Goldberg によって作られた。Griffith によれば、インターネットの過度の使用がコカイン使用に似た快感を伴うとも報告し、賭博あるいは過食に類似した行動様式を持つと報告している。現在、IAD は DSM-IV 分類においては、特定不能の衝動制御障害に該当するのではないかという説が有力である。その一方で、インターネット使用に問題がある人には他の精神障害を持つ場合が多く、その障害を治療することでインターネット使用の問題が軽減される可能性があるとしており、衝動制御に関連した特徴をもつ他の精神疾患によって IAD は引き起こされるとする説も提唱されている。つまり IAD は、単独で障害とみなすことができるという見解と、他の精神障害が原因であるという 2 つの見解が存在することになる。

最初の実証的研究が 1996 年に Young により行われたが、彼は Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders-IV (DSM-IV) における精神活性物質依存症の定義を参考に新たな診断基準を提案した。それは 8 項目からなり、

- (1) インターネットに夢中になっている
- (2) インターネットにより多くの時間を割かなければ満足できない
- (3) インターネット使用を自制しようと努力したが困難であった
- (4) インターネット使用を控えると気分が憂鬱になったり、機嫌が悪くなったり、イライラしたりする
- (5) ついつい予定よりも長くインターネットに接続してしまう
- (6) インターネットのために仕事や学校を休んだ、あるいは人間関係を失ってしまったことがある

(7) 家族や治療者、その他の親しい人間に、どの程度インターネットに接続しているか嘘をついたことがある

(8) 現実逃避あるいは落ち込んだ気分を盛り上げる目的でインターネットを使う
の各項目のうち 5 つ以上を満たす者を IAD と定義している。その後、Beard と Wolf により改訂され、(1)~(5)を全て満たし、かつ残り 3 項目のうち少なくとも 1 つ以上を満たすものとされた。Young はインターネット依存症を DSM の次の版である DSM-V に含めるように提唱している。

IAD はその治療面においても不明な点が多く、衝動性の制御という観点からさまざまな薬物療法が模索されているが、未だ強固なエビデンスは存在しない。その一方で Young は認知行動療法的アプローチが望ましいとし、114 名を対象とした 6 ヶ月間のプログラムを設定し臨床研究を行い、その効果を報告している。これらに関する臨床的研究は諸外国でも数少なく、我が国においては皆無である。特に認知行動療法においては、近年ようやく我が国にも導入されつつあるものの、その効果やその転帰を予測する研究は少ない。欧米では認知行動療法の有効性は確立しているが、我が国では精神療法における認知行動療法の地位は低く、今回の臨床研究において実証を積み重ねることにより、認知行動療法の更なる普及に貢献することも可能であると考えている。

2. 研究の目的

現在に至るまで IAD の病態の解明は十分になされておらず、不明な点が多い。またその治療法も殆ど確立されていないにもかかわらず、IAD による社会的損失は非常に大きな問題となっている。そこで本研究において IAD の更なる病態解明のため、ウェブサイト上でのオンラインアンケートを用いて、インターネット使用に問題がある者における、併存しうる抑うつ症状との関連を調べる。とりわけインターネットの使用時間および行動パターンと、精神症状との関連について探索を行う。

またホームページ上でのオンラインアンケートに答えた者のうち、IAD と診断され治療を希望する者に対して、IAD に対する薬物療法および認知行動療法を施行し、これらの効果の検討を行うこととした。

3. 研究の方法

本研究ではインターネット依存障害(IAD)の病態解明のため、匿名のオンラインアンケートを用いて、インターネット使用に問題がある者における、抑うつ症状との関連を調べ、そしてインターネットの使用時間および行動パターンと、精神症状との関連について探索を行った。IAD の重症度の評価は、Internet Addiction Test 日本語版(IAT)を用いた。精神症状との関連については、Self-rating Depression Scale(SDS)を施行

し抑うつ症状を評価した。また、これらの対象者にインターネットの使用時間および行動パターンに関するアンケートをオンラインにて施行し、ウェブサイト(ブログを含む)の閲覧、メール、ソーシャルネットワークサービス(SNS)、オンラインショッピング、オンラインゲーム、オンラインチャット等のインターネットの使用状況を調べた。またホームページ上でのオンラインアンケートに答えた者のうち、IAD と診断され治療を希望する者に対して、併存しうる精神障害を調べ、IAD に対する薬物療法および認知行動療法を平成 24-26 年度の間で施行し、これらの効果の検討を行うこととした。

4. 研究成果

インターネット上にて IAD についてのスクリーニングテストを 4000 サンプルに対して行った結果、310 名(うち男性 155 名)が調査の対象となり、その年齢は 40.1 ± 12.4 歳であった(表 1)。またその使用時間は 42.44 ± 39.30 、IAT 得点は 50.06 ± 15.21 、SDS 得点は 40.04 ± 6.40 であった。IAT 得点と SDS 得点は相関を認め、その相関係数は $0.212(p < 0.001)$ であった。また、インターネット使用時間をそのコンテンツで分類し、IAT 得点と重回帰解析を行った結果、IAT 得点とインターネットの閲覧($r = 0.241$, $P < 0.001$)およびオンラインチャット($r = 0.123$, $P = 0.033$)の使用時間の間に相関を認めた。(表 2)

表 1、患者背景

	平均 ± 標準偏差
年齢(歳)	40.1 ± 12.4
使用時間(時間)	42.4 ± 39.3
IAT 得点	50.1 ± 15.2
SDS 得点	40.0 ± 6.4

表 2、インターネットの様々なコンテンツの使用時間と IAT 得点における相関

	SNS	オンラインショッピング	オンラインゲーム
使用時間(時間)	3.3 ± 8.5	3.0 ± 5.9	4.7 ± 11.8
IAT 得点	0.302	0.268	0.186

	チャット	ホームページの閲覧	メール
使用時間(時間)	1.2 ± 3.9	25.4 ± 24.3	4.9 ± 9.3
IAT 得点	0.033*	<0.001*	0.371

* $p < 0.005$

近年、インターネット依存障害に関する研究において、その重症度と、社交性、抑うつ、自己評価の低さとの相関が報告されている。本研究でも SDS 得点と IAT との相関を認め、我が国においても同様の傾向があったことが確認された。

インターネット依存障害の患者はウェブサイト(ブログを含む)の閲覧、メール、ソーシャルネットワークサービス(SNS)、オンラインショッピング、オンラインゲーム、オンラインチャットなど様々なコンテンツに時間を費やしており、オンラインゲームがその最たるものと問題視されている。本研究ではその重症度とウェブサイト(ブログを含む)の閲覧とオンラインチャットとの間に相関を認めていたが、オンラインゲームとの間には相関は認めなかった。

オンラインアンケートに答えた者のうち、IAD と診断され治療を希望する者に対して、現在薬物療法および認知行動療法を施行したが、治療に対する動機付けが困難であることから認知行動療法については脱落例が多く、十分なサンプル数を確保することができず、効果および転帰予測因子の検討は困難であった。疾患の特性上、本人の治療に対する動機を付けること、そしてその治療の中でそれを維持していくことは困難かもしれないが、脱落例を最低限に抑えるためにも今後いかに治療に対するモチベーションを高めていくことが本疾患の治療における大きな課題と言えよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

片上素久、インターネット依存障害、臨床精神医学、査読あり、42(9)、2013、1133-113

〔学会発表〕(計 2 件)

片上素久、2014 年 10 月 6 日、Internet Addiction and Mental Health、International Society of Addiction Medicine World Congress、パシフィコ横浜(神奈川県・横浜市)

片上素久、2013 年 5 月 24 日、インターネット依存障害の臨床経過について ~ 当科における症例から ~、第 109 回日本精神神経学会学術総会、福岡国際会議場(福岡県・福岡市)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

片上素久(KATAGAMI, Motohisa)

大阪市立大学・医学(系)研究科(研究院)・

講師

研究者番号：50572971

